

# 病弱特別支援学校に在籍する心理的な課題を抱える子どもの 「自分らしく豊かに生きる力」を育む実践的研究 ー子どもの見立て方の研修機能を備えたケース会議の試行ー

研究代表者：北岡大輔（和歌山大学教育学部）

共同研究者：園田真一郎、橋爪巳希、松下香好、  
田端友梨、佐々木渉、碓間純子、  
櫻井多岐子、岡 潔  
（和歌山県立みはま支援学校）

## 1. はじめに

近年、病弱特別支援学校では心身症や精神疾患のある子どもの在籍が増加傾向にある。そのため、病弱特別支援学校に在籍する子どもが抱える心理面の課題は多様化してきており、その教育的対応を検討することが喫緊の課題となっている。しかし、学校現場の教員は、心理面の課題を抱える子どもが呈する様々な行動上の問題への対処に苦慮し、緊張度の高い対応を迫られている現状にある（熊地ら、2013）。また、石隈・田村（2018）は、援助者がそれぞれ異なる方針で子どもに関わることは、苦戦している子どもをさらに混乱させる可能性がある」と指摘している。そのため、担任個人としての対応にとどめるのではなく、学校全体での支援体制を構築し、チームとしての教育的対応を検討していくことが求められている。

このようにチームとして対応を考えるにあたっては、ケース会議の効果的な実施が期待される。しかし、実際にケース会議を実施することについては、自分の指導が批判されるのではないか、自分の指導が不十分だからケース会議が計画されたのではないかといった担任の不安感や、業務に追われる中で資料を準備しなければならない、会議に時間を割かれ授業準備ができなくなるといった参加教員の負担感に結びつきやすい。そのため、ケース会議の効果的な実施に向けて、ゴール・方法・ルールなどを明確化することなどが試みられている（佐藤、2012；隈元ら、2024）。

一方、子どもの呈する行動上の問題は、表出している行動そのものに注目が集まりやすく、そのような行動が表出する背景を見立てることは容易ではない。特に教職経験が浅い教員にとっては、自分の見立てに自信がなく不安を感じていたり、反対に固定観念にとらわれて見立ててしまったりすることも少なくない。そのため、ケース会議においても、参加者間で見立てを共有して指導・支援の方針を一つにすることに困難が生じやすい。

本研究では、教員が感じる不安感・負担感の実情を探るとともに、それらを低減し、子どもの行動面の事実と見立てを切り分け、それらを順序立てて協議をするケース会議を案出・試行する。試行により得られた結果から、このケース会議により得られる効果を検討する。

## 2. 方法

### ①事前アンケート

校内でケース会議を行うことに対する職員の意識を聞き取ることを目的に、アンケートを実施した。

対象 A 病弱特別支援学校 教員（42 名）

実施方法 Microsoft Forms により実施

実施期間 2024 年 6 月 19 日（水）～6 月 28 日（金）

質問項目 表 1 の通り

## ②作戦会議の試行と事例提供者・参加者への聞き取り

「ケース会議」の名称を「子どもと先生のための作戦会議」（以下、作戦会議）として実施した。ケース会議のイメージを柔らかにして心理的なハードルを下げ、主体的な参加に繋げると共に、子どもにとってはもちろんのこと、教師にとっても有益な時間となるようにとの願いを込めている。

作戦会議の形式としては、事例提供者の不安や負担感の軽減をねらって準備を必要としない形にするるとともに、協議する際はホワイトボードを活用して事実と見立てを切り分けて記録し、視覚的に情報を整理しながら支援の企画や役割分担まで順序立てて進められるようにした。具体的には、「事実の洗い出し」「多面的な見立て」「指導支援の企画・役割分担」という3段階の流れで会議を進めた。

作戦会議終了後、事例提供者と他の参加者に対して作戦会議の感想や実感した効果について聞き取りを行った。聞き取った項目を表2に示した。

表1 事前アンケートの質問項目

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・本校における児童生徒への指導について不安はあるか</li><li>・ケース会議を開くことのメリットを感じるか</li><li>・ケース会議を開く望ましいタイミング</li><li>・実際にケース会議を開いているタイミング</li><li>・ケース会議にどのようなことを期待するか</li><li>・ケース会議を開くとなった際の不安の有無とその理由</li><li>・ケース会議を開くとなった際の負担感の有無とその理由</li></ul> |
|---|

表2 作戦会議後の聞き取り項目

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・作戦会議への不安感・負担感の有無</li><li>・どのような効果を実感したか</li><li>・改善を望むところ</li></ul> |
|--|

## 3. 結果と考察

### ①事前アンケート

回答者は26名（回収率61.9%）であったが、本校教員が持っているケース会議に対しての思いやニーズの概要を掴むことができた。

まず特徴的であったのが、「ケース会議を開いてほしいと思ったことがあるか」の設問に「よくある」「時々ある」と答えた人は23名（88.5%）、「ケース会議を開くことにメリットがあると感じるか」の設問に「とてもある」「少しある」と答えた人が25名（96.2%）という結果であった。本校職員のケース会議に対するニーズが一定の高い水準にあることが分かる。

また、「ケース会議を開くのに望ましいタイミング」「ケース会議を実際に開いているタイミング」「ケース会議に期待すること」については、それぞれ複数の選択肢の中から1～3位までの順位付けにより回答を求めるものであったため、1位＝3点、2位＝2点、3位＝1点として集計を行った。結果を表3～5に示した。「望ましいタイミング」「実際に開いているタイミング」は共に「緊急性」「必要性」がある場合が上位2項目となったが、実際に開いているタイミングでは「緊急性」が突出して多かった。また、「望ましいタイミング」では「予防的」が3位で、4位より大きく上回った（11点差）が、「実際に開いているタイミング」では反対に4位で、3位より大きく下回った（18点差）。「期待されること」については、「現状の整理」や「見立て」を抑え、指導支援の明確化など、「次の一手」につながるような項目が1位となった。

不安感及び負担感についての質問では興味深い結果が得られた。ケース会議を行うにあたって、「不安を感じるか」の設問では「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」が23名（88.5%）であったが、「負担感があるか」の設問では、「あまり負担感がない」「全く負担感がない」は16名（61.5%）となり、差が見られた。負担感の中身は人によって異なっており様々であるが、最も多かったのは「会議に向けた準備（資料作成等）」の7名であった。

## ②作戦会議の試行と事例提供者・参加者への聞き取り

作戦会議実施後、事例提供者（学級担任）7名に聞き取りを行ったところ、効果を実感しているという意見が多く寄せられた。共通点として、一人の子供の見立てを複数人で行うことで新たな気づきがあったこと、今後のアプローチに向けての閃きや方向性を定めることに繋がったことが挙げられる。

表3 ケース会議を開くのに望ましいタイミング

	1位	2位	3位	合計点
担任が必要を感じたとき	9	11	1	50
緊急性がある場合	9	7	4	45
予防的	2	4	6	20
周囲から声をかけられたとき	0	0	9	9
平常時	1	0	1	4
その他	1	0	1	4

合計点は1位3点、2位2点、3位1点として算出

表4 ケース会議を実際に開いているタイミング

	1位	2位	3位	合計点
緊急性がある場合	21	1	3	68
担任が必要を感じたとき	2	17	5	45
周囲から声をかけられたとき	1	7	8	25
予防的	0	0	7	7
平常時	2	0	1	7
その他	0	1	2	4

合計点は1位3点、2位2点、3位1点として算出

表5 ケース会議に期待すること

	1位	2位	3位	合計点
指導・支援の方向性の明確化	6	8	5	39
多面的な見立て（課題の整理）	3	9	4	31
現状の整理（子どもをとりまく環境）	7	2	1	26
情報共有・共通理解	5	2	3	22
子どもの危機的状況の解決	3	2	2	15
役割分担（チーム支援）	1	1	3	8
子どもの実態把握	0	2	1	5
関係機関との連携	0	0	4	4
教員の心理的な支え	0	1	1	3
その他	0	0	0	0

合計点は1位3点、2位2点、3位1点として算出

また、特に事前の準備等を必要としないことを周知したため、負担感については全員が「なかった」と答えた。また、不安感についてもほとんどの人が「なかった」と答え、1名が「限られた時間で上手く話せるだろうか」という不安感があったと回答したが、事後は「何とかなったかも」という振り返りであった。

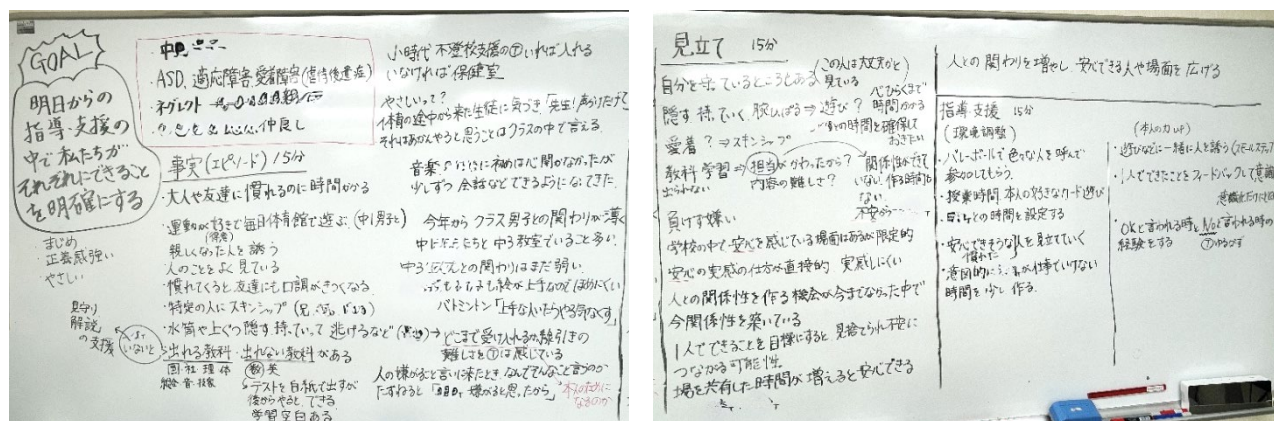
さらに、1年生（入学年次）での実施が効果的であるという意見や、記録しながら順序立てて行うことの有効性を実感できたり、多様な意見を聞くことの楽しさを感じたりしながら、自身の学びや専門性の向上に繋がっているというような声もあった。課題としては、後半の指導支援の検討にもう少し時間が欲しかったということや、指導効果の検証も含めて、継続して複数回実施してほしいという点が挙げられた。

加えて、事例提供者以外の参加者からは関わる人が集まって話すことの意義が挙げられ、それが多面的な見立てに繋がったり、生徒を気にかける人の増加に繋がったりするのではないかと期待感、リアルな事例を元にした話を進めることによって得られる学び（研修効果）の実感に関する声があった。その反面、作戦会議の参加者だけでなく、全校の教員へ共有していくことや日常的に実施する場合の時間の確保についての課題も同時に挙げられており、今後の課題でもある。

今後は、これまでコーディネーターを中心に行っていたファシリテーター（進行役）や記録の役割を色々な教員が担うことができるようにしたいと考えている。実施にあたってはファシリテーターや記録の経験がない人でも、スムーズに作戦会議を進行できるように、準備や目的、時間配分を明記するとともに、各フェーズにおける留意点や深める問いかけ、観点をまとめたマニュアル作りが必要で

ある。さらに話を深めていくような問いかけ方の進行スキル向上や効果的な時間配分については、今後の経験の積み重ねや更なる研修が必要である。

#### 写真 実際のホワイトボードの記録



この記録は、個人名を読み取れないように画像修正し、病弱特別支援学校において一般的によく見られる事例部分に情報を絞り、そのうえでA特別支援学校の学校長に掲載の許可を得て掲載している。

## 4. 総合考察

結果及び参加者の声を参考にしながら共同研究チームで協議し、作戦会議の実施によって得られる効果として、以下の5点を抽出した。

### ①担任のエンパワメント

子どもにとって学校における主な相談者、支援者は担任である事実は変わらない。しかし、多くの参加者が一緒に考えて、話し合う時間をつくることで、担任も勇気づけられると共に、思考がブラッシュアップされ、より主体的に自信を持って関わっていただけるようになると考えられる。

### ②指導支援の方向性の明確化

実態把握にかかる時間が短縮され、スピーディーに方向性を導き出すことにつながった。また、方向性を共有する人が増えることで、チームによる指導支援の方向性の共有が促された。ケース会議後に関わってくれる人が増えた実感を持たせた担任もいた。

### ③チームづくり

情報を共有することで子どもを気にかける人が増え、校内の支援体制が充実したこと、セーフティネットの構築に寄与したものと考えられる。実際に、生徒が不安定になった時に、普段関わりの少ない他学部の教員がやりとりできた場面もあった。

### ④簡易版個別の指導計画作り

「実態(事実)→見立て→目標→手立て」と整理された作戦会議後のホワイトボードの情報は見やすく、簡易版個別の指導計画として活用することも考えられる。一見してその子どものことが概ね分かる構造になっている。個人のバイアスを取り除き、広い視野で子どもを理解することができるツールに成り得ると考えられる。

### ⑤見立て方の研修

教員による子どもの見立ては、自身のこれまで経験に基づく部分が大きく、限定的なものになりやすい。しかし、作戦会議では、自身が普段から関わっている子どもに対する他の教員の多様な見立て方を聞くことで、気づきが生まれる。結果的に、自分の引き出しが増え、様々な困り感に対する指



導支援を学べる場になっていたことから、専門性の向上や指導力アップに繋がるものであったと考えられる。事例にはリアリティーがあり、疑似体験ができるような感覚もあり、ディスカッションしながら進める方法は、活字を読むより自身の学びになりやすい。また、深掘りしていくのが面白い、楽しいという意見が複数得られたことから、教員自身の「主体的・対話的で深い学び」に繋がったものと考えられる。(子どもの学びとの相似形)

今回実施した作戦会議は、参加した教員の人数や、実施した回数が限定的なものであった。そのため、抽出した作戦会議の効果は仮説的なものととどまる。今後の課題としては、作戦会議を複数回設定してその手法と効果の関係を整理することや、参加者以外の教員にも内容を広め、全体に共有していく方法を検討することが考えられる。しかしながら、本研究の取り組みを通して、作戦会議の考え方や捉え方、意義や効果の全体像が分かり、教員の心理的ハードル（負担感・不安感）を低減するための示唆が得られた。そして、ファシリテーターや板書の手法を検討し、作戦会議のマニュアル化の手がかりを得られたことは非常に大きな収穫、進歩であった。今後も作戦会議を充実させ、子どもたち一人一人の学びを支えていきたいと考えている。

## 文献

- 石隈利紀・田村節子（2018）新版 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門：学校心理学・実践編. 図書文化社.
- 熊地需・佐藤圭吾・斎藤孝・武田篤（2013）特別支援学校に在籍する知的発達に遅れのない発達障害児の現状と課題(2)：教員が抱く困難性について. 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学, 68, 97-101.
- 隈元みちる・森本哲介・山本真也・松本剛（2024）ケース会議経験の積み上げによるイメージの変化の検討. 兵庫教育大学研究紀要, 64, 91-97.
- 佐藤節子（2012）学校における効果的なケース会議の在り方について：『ホワイトボード教育相談』の試み. 山形大学大学院教育実践研究科年報, 3, 23-30.